令和８年度　第２回奈良市社会教育委員会議　会議録

開催日時	令和８年１０月１３日（火）午後１時３０分～午後３時００分			
開催場所	奈良市役所　北棟６階　６０２会議室			
出席者	委員	岡田和委員、岡田龍委員、加藤委員、紙家委員、小北委員、柴田委員、中村委員、廣瀬委員【計８人出席】		
	事務局	教育長、教育部長、教育部次長、地域教育課長、中央図書館長、奈良市生涯学習財団事務局長、公益事業課長		
開催形態	公開（傍聴人１人）		担当課	教育部 地域教育課
議題又は案件	（１）　奈良市社会教育推進計画の改訂について （２）　その他			

議事の概要及び議題又は案件に対する主な意見等

（１）　奈良市社会教育推進計画の改訂について

＜事務局より資料説明＞

○重点事業１．公民館事業

【委員からの意見・質問等】

・「つながり」の参考指標に「自習スペース」を位置付けているが、「まなび」の参考指標ではないか。

→自習スペースは勉強だけを目的とするものではなく、子どもや若者が学校・家庭以外で気軽に立ち寄れる場を目指しているため、「つながり」に関わる取組として整理した。

・自習するだけでは、必ずしも人とのつながりが生まれるとは限らない。交流や活動を生み出す仕組みが必要である。

・「自習スペース」という名称は、勉強をする場所という印象が強く、事業の目的を狭く伝えているのではないか。「子どもの居場所」や「青少年・若者が集まるスペース」といった、より広い目的を示す名称を検討してはどうか。

・学校に行きにくい子どもが公民館を利用した場合、学校の出席扱いになるのか。

→公民館ではないが、奈良市では教育支援センター「HOP(ホップ)」を設け、支援員を配置し学校外での学習や活動が一定の条件のもとで出席扱いとなる取り組みをしている。

・公民館職員が場に張り付いていると、ふらっと来て自由に使ってほしいという事業の趣旨から外れるのだろう。

→計画に掲載するに至っていないが、現状として奈良市生涯学習財団と奈良市社会福祉協議会が、将来的に地域福祉と社会教育との連動による地域づくりを取り組んでいこうという動きがある。その中でめざしているのは、学校の出席扱いとなる「HOP(ホップ)」のような居場所の一歩手前の場をつくることを考えている。公民館の職員だけではなく、指導的立場ではない、若者や地域教育協議会といった方々少し上の世代とつながりをつくるという場になればよいと思う。そういった思いから、「つながり」の指標に入れている。ただ市民の方には自習スペースとなると名称や捉えにくいと思うので再考は必要。

他機関連携し生涯学習センター等の現在若者が来ている館からはじめ、地域性を考慮しつつだが全館へ、拠点数と機能性を活かして取り組みを進めていきたい。

・「自習スペース」という名称変更を今回検討されるのか。

→「自習スペース」というと敷居が高いだろう。もっと子どもたちにわかりやすいキャッチ

フレーズなどあればいいだろうが、地域課題に応じて各館で変更していくことを考えている。
・たしかに「交流スペース」などの表現は意味が広くなりすぎるため、各地域の特性や利用者の実態に応じて検討する必要がある。
→市立図書館であれば自習スペースを YA ルームとして設置している。ターゲットや呼び方は非常に難しいところはあるが、つながれる場としてキャッチーな言葉があれば案もいただければと思う。
・学校へ行きづらい子どもがどれほどいるのか実態があまりわかっていないが、子どもに認知度が低い公民館へ行くことができるのか。また公民館には地域の大人や既存の利用団体がいるため、学校に行きにくい子どもや若者にとって、かえって利用しづらい場合もある。ケアする必要もあるので、居場所と一括りにすることは難しいように思う。居場所について公民館はどのように位置づけするのか。
・公民館の利用には団体登録がいる。学校の空き教室が使いづらくなってきて、地域で集まって高校生が学校を超えて集まる場を考えても、登録しないと使えないから地域は公民館を使わない。居場所という意味を広く考えると、子ども達が使いやすい場所を作っていただければと思う。
・公民館はふらっと行って、当日空いていたら使用できないのか。
→原則、登録は必要。令和 6 年度から始めた公民館での自習スペース事業は、ロビーや図書室などを活用し、団体登録なしでも気軽に利用できる環境づくりを進めている。
・自習スペースとしてのまなびの場ではなく、不登校支援などの居場所にするなら人を配置する必要があるので、要件を満たしていないように思う。
→館や地域によって幅広い様々な特性があり、その特性ごとに要件を満たす居場所づくりをしていくことの難しさを感じながら、居場所づくりの事業をスタートしているところ。公民館の良さを活かし、様々な人が来れる場になればと思う。
・年少な子どもは公民館へ来ても、YA 世代が来ない現実もある。
・自習スペースだけでは、勝手につながりが発生するのではない。しくみをつくる必要がある。
・どの程度自習スペースについて市民に広報されているのか。中学校内の自習スペースを実施しても定着することが難しい。PR がいると思う。
・まず自習スペースを活用しながら、つながりづくりをどうしていくのか。
・放課後子ども教室やバンビーホームなど、コーディネーターが頑張っていただいて様々な魅力あるまなびがある。おもしろさがあるから子ども達が来ているので、これだけでは子どもは難しい。今の子どもたちを育てて、次の子どもたちを育てるといった主体性がいるが、とても指導する人を見つけるのに苦労するだろう。保護者への啓発等も必要。上の世代とつながる場は貴重。
・自習スペースの設置館数ではなく、取組館数を参考指標としている。各館でどのように自習スペースを活用した取組が行われているかを評価する視点を大切にしていただきたい。
今後事業が発展していくことも踏まえて、自習スペースの活用取組件数など、部屋をどう活用したのかを指標にしてもよいのではないか。
名称に抵抗があるのかもしれないけど、子どもを呼び寄せるというより、子どもや若者が自分のやりたいことを実現できる場として、YA（ヤングアダルト世代）のアイデアを活かして事業展開してもよいのではないか。
・自習スペースの設置が目的ではなく、青少年や若者が気軽に集まれるスペースをどう作ったかが大切だろう。結果としてこの公民館は自習スペースであり、他の公民館では、上の世代と交流できる場となるなど、地域特性に応じて展開していけばよいだろう。自主グループを作ることが目的でもない。
→ユースセンターのようなイメージも考えられる。子どもを呼び寄せるというより、中高生や若者がやってみたいことをするスペースとしてあり、その際には相談に乗ったり、活動を支援したりするコーディネーターやプランニングする人等も必要である。来て価値がある、やりたいことがある場になっていくよう、活動できる種をまくことが大切である。

・部屋の名前というより、その部屋をどう活用するのかが重要。
→部屋そのものではなく、部屋を起点とした取組に修正したい。

＜重点事業２．地域学校協働活動＞
【委員からの意見・質問等】
・「交流のつどい」の参加者総数を「つながり」の指標とすることは妥当か。「ささえあう」につながる「つながり」は、地区内のつながりだと思うので、別の地域とつながる「交流のつどい」はまなびにはなるだろうが、「ささえあうにつながるつながり」に入れるのは違和感がある。地域をささえあうことが最終目標。
→各地域間のつながりを生み出す「交流のつどい」。地区内のつながりだけでは、コーディネーターの行き詰まり感が出る。他の地区とつながり、自分の地区へ活かしささえあいに活かせるため、「つながり」に入れている。
・まなびにも、個人のまなびと集団のまなびがある。集団のまなびは限りなく「つながり」に近い。「交流のつどい」で地区の内容を発表するために、活動を振り返り地区内のつながりをつくるという意味でつながりに入っていると捉えることもできる。
・交流のつどいに参加することで、校区外のつながりを生み出しているので、これは順当だと思う。
・参加者数も内訳が年々違うので、参加者数と一括りにするのはどうか。
→会場の収容人数や開催方法によって左右されるため、単純に人数の多さで評価するのではなく、「交流のつどい」に向けて、どういう取り組みをしたのか、コーディネーター同士のつながり、つながりがどうささえあいを生み出したのかを評価できればと思う。

＜重点事業３．図書館事業＞
【委員からの意見・質問等】
・図書館事業について、来館者数を「つながり」に入れるのはどうか。
→「まなび」「つながり」「ささえあう」に、どの項目を位置付けるかが難しい。
「まなび」:（資料提供サービス）図書や資料の提供、学習機会や情報の提供
「つながり」:（空間提供サービス）イベントや交流の場、滞在できる空間の提供
「ささえあう」: 地域にどのようなことができるのかという視点で指標を作成した。
本日の議論を踏まえて、指標に少し言葉を足す必要があると思った。前提として、図書館は数値を出しづらいことがある。フードコートのように、個人が何のために来ているのかを聞かれないから、人が来やすい場となっている。
上記観点で４つの指標を整理すると、①図書貸出冊数は、自主的な学びにつながった資料（貸出冊数)、②貸出者数は、自分のまなびに資料を役立てた人の数（貸出者数)、
③来館者数は、イベントの実施によって集団的な学習機会をもった人の数（来館者数)。
来館者数は図書館に来た方の数であり、イベントのためだけに来たのか、それとも本を借りるためにきたのか区別できないため、来館者数としている。
④移動図書館の巡回回数についてだが、移動図書館については、原則地域の要望に基づいて巡回しているため、巡回回数が増えるのは地域の方の要望が必要。どのような地域ニーズに応えているのかを評価に生かす必要がある。
・「つながり」の指標に、来館者数ではなく、「つながり」づくりのためのイベント数にしてもいいのではないか。
→指標として検討の余地がある。当初来館者数としたのは、イベントにこだわらない交流を生み出すことを指標として考えていた。
・参考指標について、数字の裏にある事実や現実、成功、失敗、仕組みやフローも知ることが目的である。最終的に図書館が果たしている役割が具体的に見えてくることが望ましい。

＜その他＞
・今回の議論を踏まえ、各担当部署において指標や説明内容を修正することとした。

・社会教育委員が交代した場合に、数値目標だけが引き継がれ、これまでの議論や事業の背景が失われる可能性が懸念される。そのため、評価の際には、数値の裏にある具体的な事実、取組の経過、成果だけでなく、課題や改善点も含めて共有し、これまでの議論や取組の蓄積が引き継いでいけるよう整える。 ・「コラム」という表現について 内容は詳しく説明されていてよいが、「コラム」という名称に違和感がある。 →「コラム」という表現を使用しなくても内容上は問題ない。紙面の構成との関係もあるため、「チェック」とか「ミニ解説」など別の名称を含めて検討する。 ・計画案の棒グラフの横に記載された説明文が途中で切れている箇所があるため、レイアウトや文章を整える。	
資　　料	・次第 ・資料